

地域福祉文学大賞

部門賞（社会福祉協議会部門）

成年後見センターへようこそ

大塚 遥香

令和5年度に全国公募した「地域福祉文学大賞」の受賞作品です。
作品の著作権は、社会福祉法人新潟市社会福祉協議会にあります。

新潟市西区社会福祉協議会

電話口の女性は通話相手が変わって落ち着いたのか、2人の会話が、当初よりもスムーズになっている。

「あ、そう。いらっしやいましたか、良かった。では、また何かあれば、お電話くださいね。」

どうやら電話中に待ち人が来たようである。

颯爽と現れた女性はふう、と息をついて受話器を置き、まっすぐにあさを見た。

「成年後見センターへようこそ、味方さん。」

「では改めて自己紹介をさせていただきます。僕はこのセンターの職員で、笹

川誠といいます。こちらは、日馬百合くさまさん。同じく、センターの職員です。」

「よろしく、味方さん。日馬です。」

「こちらこそ、よろしくお願いたします。あの、く、日馬さん、さきほどは、どうも、ありがとうございます。」

「着任早々大変だったわね。びっくりしたでしょう。」

日馬がいたずらっぽく笑う。あさはなんだかほっとした。

「今年から新規職員がセンターに配属されることになることは聞いていたよ。それが味方さんってわけだ。」

笹川の口がムズムズする。

「味方、みかた。いいねえ。そんな名前、僕初めて聞いたよ。皆の味方の味方さん。小学生のときとか、よく言われなかった？」

これをずっと言いたかったであろうことが容易に想像できて、あさはふっと笑った。

「はい。小さい頃から、味方、味方って言われ続けているので、もう慣れっこです。新潟では割と多い苗字だって、祖父母から聞いています。」

「へえ、味方さん、おじいさまとおばあさまが新潟にいるの。」

「はい。いまは祖父母と同居しています。」

「そうか。このセンターはね、3年前に新しく設立したばかりで、なんにしる、ひとが足りない。それでも、新潟市の成年後見事業の中核を担う重要な役

割がある。大変なところだ。でもね、やりがいもある。・・・味方さん、一緒に頑張りましょう。」

笹川の目が優しい。日馬を見ると、こちらも笑っている。

あさはセンターの事務室を見回した。まだ比較的新しそうな事務机が3つ。壁には大きな書類棚にホワイトボードとカレンダー。ドアを開けたところにはカウンター。なるほど、まだ歴史が浅いだけに、物品の数も少なく、割と簡素なしつらえである。ここが自分の職場になるのだ。よろしくお願いします、と頭を下げた。

翌日からあさの後見センター職員としての毎日が始まった。

指示されたのは「センターにいること」。そして「電話をとってメモをすること」そして「定時で帰ること」。

とかくセンター職員は、自席に座ってゆっくり仕事をする暇がない。家庭裁判所、地域包括支援センター、老人ホーム、市役所など、笹川も日馬も、戻ってきたと思ったらすぐに「次は●●に行ってください」と息つく間もなく別の場所に行ってしまう（お昼をちゃんと食べているんだろうかと心配になるほどだ）。その間にもセンターには電話がかかり、人が来る。関係者であれば折り返す旨伝えたり、要件や急ぎの度合いなどをメモしておけばまだしのげる。曲者なのは外部からの問い合わせだ。なにしろ

「父親が認知症になってしまい、入院先から成年後見制度を使うように言われたが、どうすればよいのか。」

といったものから、
「悪徳商法に騙されて200万円で壺を買ってしまった。どうすればよいか。」
とか

「浪費をする息子をどうにかしたい。」
とか、実に多種多様なのである。聞けるひとがないので、質問を受けるたびに「少々お待ちくださいね」と言って保留にし、書籍やインターネットを調べ、明記してあるものがあれば答える。自分では経験がなく、どうしても答えられないものや対応に迷うものは、同じ建物の別部署に相談をもちかけ、一緒に考えてもらうこともしばしばだ。

笹川や日馬が帰ってくるのは、たいてい夕方だった。2人のデスクワークが始まるのはたいてい夕方くらいからだった。

そんなこんなでせわしなく毎日が過ぎていった。ふと気づいたら、あれだけうるさかったセミが大人しくなっている。

夏が終わろうとしていた。

「味方さん、11月に、老人ホームで、成年後見制度の説明会があるんだ。補助者として同行してくれませんか。」

笹川からそう声をかけられたのは、秋の半ばだった。

「私が、ですか。具体的には何をやるんでしょう。」

「うん。世間には、後見制度の利用が必要なのに、知らずに手続きの利用ができない方々がいる。そういった方々に、後見制度や、我々社協の存在をお知らせするというのが、今回の説明会の趣旨だ。発表内容は基本的に去年と同じにしようと思っている。パワーポイントでスライドを示しつつ、発表者が話す。

資料は・・・こんな感じかな。」

笹川に手渡された資料をしばらく読んで、あさはぱつと顔を上げた。

「笹川さん、それ、私にやらせてください。」

その日から、資料と、書籍と、それからパソコンとにらめっこする日が続いた。

昨年の資料は主に文字や数字で説明がされていた。しかしそれは老人ホームで発表するにふさわしいものなのだろうか、と一見して感じたのである。あさの視点からするとまず見にくいし、字やら数字が多すぎる。ありていに言えば面白くない。字を減らし、写真やイラストにしたほうが見ている側だってきつと飽きない。大学時代に漫画研究部の部長として日々オタ活に励み漫画作成をしていたあさは、二次創作や同人誌作成やらで培った素人というにはハイレベルすぎる画力でアニメーション漫画を創作した。ある日突然家族が認知症になった！どうしよう！という筋書きである。はじめての自分が主体となる仕事が楽しかった。

11月某日。笹川とともにあさは老人ホームに訪問した。広間のスクリーンにパソコンを接続し、準備する。

今回は発表もやらせてもらうことにした。笹川には質疑応答や不測の事態に備えて控えてもらう。

「それではこれから、新潟市成年後見センターの説明をさせていただきます。みなさん、成年後見制度をご存じですか。認知症や精神疾患、脳の病気などによって、ご自身では法的な契約や財産の管理ができなくなった方のために、サポーターをつける制度です。当センターでは、そのお手伝いをしています。こちらをご覧ください・・・」

広間に自作のアニメーションが流れた。その後の説明もつつがなく終わり、「以上で終了させていただきます。」と締めたところで、あさは内心、ガッツポーズをした。やった！最後までやりきった！すごい！私！

「続いて質疑応答に移ります。ご質問などある方、いらっしゃいますか。」

バトンタッチした笹川が場を引き継ぐ。

ふらっと、ひとりの男性が手を挙げた。

ホームの職員が近づいていき、マイクを渡す。

「車椅子に乗ったそのおじいさんは、震えた手でマイクを持ちながらあさに目を向けた。」

「あんだ、そのの、女の職員さん。」

ひゃいつ、と変な声が出そうになるのを必死で押し殺し、なんででしょうか、と答える。なんで私ご指名で質問がくるのー?!内心プチパニックが起こる。予想もしていなかった展開だ。

「あんだ、後見制度は、ぼけたひとの、金を守るとか、言っとるな。」

低くて鋭い声だった。いえ、そういうわけでは、と言おうとしてマイクを持ち上げようとする前に、さらにかぶせるようにおじいさんが続ける。

「うちのばあちゃんは、そうやって、弁護士に、通帳をとられたままや。いくら言っても、通帳を渡してくれん。ばあちゃんがぼけるまで必死に2人で貯めた金は、もう、いくらいつてもわしらの自由にはならん。後見人というのがついとるからな。ばあちゃんと二人で、孫のために使ったり、旅行をしたいと思つとった。」

場がしんとしすぎるくらいしんとした。誰も、何も発しない。

「何度頼んでも、弁護士は、後見がもう始まつとるからと、必要な金しかよこさん。ばあちゃんの顔も、半年に1回しか、見にこん。そのななが保護や。管理や。あんたらは、ほんとうにわしらのことを考えとるんか。ちがうやろ。ばあちゃんもわしも、そんなものは、望んどらん。二度と、正義の味方ぶらんでくれ……。」

ひとつひとつ言葉を途切れさせながらもおじいさんは言い切った。言い切つてから、ぶるぶる震えて、隣のぼんやりとした様子の車椅子の女性の手を握つた。

あさは悟った。

ああ、隣にいるのがおばあちゃんなんだ。

隣で笹川が必死に説明をしているのが遠く聞こえるようだった。

あさは最後まで自分の言葉を発することができず、説明会は終了した。

老人ホームを退去し、社協の車に乗ってからも、あさは唇をずっと噛んでいた。張り詰めていたものが切れたのは、帰宅したときだった。土間で爪切りをしていたよし子ばあちゃんの顔を見るなり、あさは声をあげて泣いた。

「そおかあ。それは大変やったなあ。」

あさの話を聞いた正一まさいちじいちゃんとはあちゃんが、こたつに入ったままため息をつく。あさもこたつである。しまうのが面倒くさいので一年中出しているのだ。それぞれの定位置は決まっている。じいちゃんが一番テレビに近いところで、寒がりのばあちゃんは、ストーブに近いところ。

あさは机を見ながらぼつぼつ事情を話した。

「ああ言われてな、分かったんや。私は何も知らん。」

自分でそう言いながら、今日のことを振り返る。じいちゃんとはあちゃんが静かに聞いてくれるので続ける。

「私はな、怖いんや。自分が正しいと思うものを、知らん間に、ひとさまに当然みたいな顔をして押し付けとるんじゃないかって。もちろん世の中には後見制

度が必要な人もおる。でもな、今日の、あのホームのじいちゃんとはあちゃんの顔を思い出すとな、世の中にはいろんな思いの人がおるのに、知らずに善意の押し付けをしてしまったんじゃないかって思って、しょうがないんや・・・。」

うつむいて話すあさにはあちゃんが問うてきた。

「あさは、なんで、新潟の大学に入ったんや。」

「だって岐阜の家から出てみたかったんやもん。」

「じゃあなんで、福祉の大学に入ったんや。」

「そりゃあ、福祉系の大学出れば、このご時世や、どこでも雇い口はあると思っただから。」

ほっほっ、とばあちゃんが笑う。

「ばあちゃんは知つとるで。車椅子やった、お母さんのほうのじいちゃんの影響があるんやろ。」

そう。実はそうなのだ。

岐阜の実家にいたころ、両親と弟たちと、そして、母方の祖父が同居していた。あさは、父や母が、祖父を介助し、からだを洗い、下の世話をし、床ずれや異常がないか夜な夜な確認し、食事を食べさせるのをずっと見てきた。

一般に介護は汚いとか臭いとかさきざきな言われようだが、両親は違った。大変なこともあったかもしれない。しかし両親はそれをあさたち子どもたちに見せることなく、いつも、祖父に自然に接していた。祖父も言葉こそうまく話せなかったけれど、いつも嬉しそうだった。それは父と母が心から祖父を大切にしている、それが祖父にも確かに伝わっていたからだ。あさはいまでも強く信じている。

そういう側面もあって、自分も福祉の道に進むことにした。

今回の配属命令を受けたとき、内心で自分の経験が生かせるかもしれないとにわかに期待したりもしたのだ。

しかし、現実は大いに違った。

鳴り続ける電話。不足する職員。電話口で延々とヘルパーへの不満を訴え続けるおじいさん。後見人から渡される生活費が足りないと言って、噛みつかんばかりの勢いで怒鳴り込む男性。1時間かけて必死に説明したあとで、「ふーん、後見制度ってめんどいんすね。」と呟いて帰った若い男性。夜遅くまで残って仕事をすする先輩2人の背中・・・。

福祉というのは、とりわけ自分の属している社会福祉協議会というのは、損な役回りだと思う。時として必要なところに必要な手を差し伸べられない不条理を感じる反面、世間が抱く福祉制度への不満やギャップとの板挟みになる。「それでもね、」

と、今度はじいちゃんが口を開いた。

「あさは、がんばるんやろう。じいちゃんもばあちゃんも、おまえがずっと頑張って勉強しとったのを知っとるぞ。」

じいちゃんが続ける。

「なあ、あさ。大変やなあ。福祉って難しいよなあ。正解がない。いろんな人の思いがある。いろんなひとを相手にせなあかん。そんでひとつっていうのは、これがまた、思い通りにならない。でもじいちゃんとかばあちゃんは、あさが頑張るとるのを応援しとる。すごいところで皆のために働いとるのを知っとる。せやが無理はせんでほしい。……たまには、酒飲んだり温泉でも行こうや。」

返す言葉が出てこない代わりに、きらりと、涙が頬を伝った。

翌日、出勤したあさの姿を見るや笹川と日馬が駆け寄ってきた。昨日のあまりの撃沈ぶりから、心配してくれていたらしい。辛い思いをさせて申し訳なかったと謝罪する笹川に、あさははっきり答えた。

「違うんです、謝らないでください、笹川さん。私、一人前に知った気になっていました。でも昨日のことで、今度は、自分自身の言葉や体験で、ひとに何かを伝えられるようになりたいって思ったんです。確かに辛かったけど、いい機会を与えてもらったと思ってます。」

「その意気よ、味方さん。」

日馬が笑って、ジャンパーを手渡ししてくれた。

「はい、これ、注文していたものがやっと届いたの。ちょっとださいけど、肌寒いときに使ってね。」

「日馬さん、ださいとはなんだ、ださいとは。歴史ある社協のジャンパーを……。」

場がにわかにも明るくなった。ありがとうございます、と言いかけたところで電話が鳴った。

また、一日が始まる。

撃沈事件からさらに時間が経ったある日。あさは栄町にひとり住む田村たへさんの自宅へ向かうべく車を走らせていた。たへさんは日常生活自立支援事業の利用者である。

日常生活自立支援事業というのは、個人が社会福祉協議会と契約を結んで、日常生活におけるさまざまなサポートを受ける制度である。その内容は金銭の管理や福祉サービスの利用援助、果てはおうちでのちょっとしたお困りごとの対応など、多岐にわたる。

たへさんはひとり暮らしの81歳のおばあさんである。早いうちに夫を亡くし、苦勞してひとり息子を女手ひとつで育ててきた。その息子がドイツへ赴任することになり、母を心配した息子夫婦が社協に相談に来たのがサービス利用のきっかけだった。

あさは担当として、御用聞きのような手伝いをしているが、孫のような年齢差のためたへさんに気に入られている。田村家に行くと、いいというのにわざわざお菓子やケーキを買って用意してある。

ちゃんとご利用料をいただいていますから、気を遣ってくださいさなくても大丈夫ですよ、それに毎回こんなにいただいちゃったら太っちゃう、とオブラートに包みながら伝えても、忘れていいのか聞いていないのか、たへさんはいつもあさのためになにかしらを用意してくれている。家にお客さんが来るのが嬉しいらしいのだ。それが分かっているから、あさも無下に扱うことができないし、たへさんにあまり強く言わないでいる。

もう少しで本格的な冬というある日、あさはたへさんと、近くのドラッグストアに来ていた。恒例の買い物の付き添いである。

「あさちゃん、帰るときにケーキいらんかね。」

「もう、たへさんったら。」

いつものように聞いてくるたへさんにあさは笑いかけた。

「今日はたへさんのお買い物に来たんですから。それに今日はお昼ご飯におにぎりを4個も食べたから、おなかいっぱいでなにも食べられないんです。」

本当は2個しか食べていないが、あえておおげさに言った。たへさんは時に自分の大切なお金を使ってでもあさに何か買おうとするのだ。彼女は決してお金持ちではなく、年金などで生活している。

それを知っているからこそ、あさは、たへさんに、自分のお金を自分のために使ってほしいと願っている。

そうかね、いらんかね、とすこし肩を落とすたへさんを見て「じゃあお言葉に甘えてケーキ買ってもらっちゃおうかな」などと言いついそうになるが、頭を振ってそれを打ち消すように言った。

「たへさん、必要なものは買えました?」

たへさんの手元にあるメモを覗き込む。買い物かごと見比べ、不足しているものがないかチェックをする。

買い物を終え、帰りはバスで帰るというたへさんと別れてあさはセンターに戻った。

たへさんの容態が急激に悪化したという連絡を受けたのはその日の夜のことである。寝る前に日馬からメールがきていた。

こんな夜にごめん味方さん、田村たへさんが急に腹痛を訴えて、いま、病院にいるらしいの。

その文面を見たとき、自分が呼吸の仕方を忘れたような気がした。そんな自分を見透かすように、メッセージはこう結ばれていた。

「いまは容態も落ち着いて眠っているみたい。明日以降、時間があれば顔を見に行つてあげると、田村さんも喜ぶんじゃないかしら。息子さんには笹川さんが連絡をしてくれるから安心して。」

そう続いてあり、ほっと力が抜ける。知らず力を入れていたらしい。

大丈夫。大丈夫よ。そう思って安心したはずなのに、よく眠れなかった。

翌日の早いうちにお見舞いに行った。たへさんは4人部屋の窓際のベッドに寝ていた。見慣れない病院着を見て心が痛む。あさはたへさんの普段着が好きだった。家にいるときにいつもエプロンをつけているたへさん。外に買い物に行くときは外行きの服を着ていくおしゃれなたへさん。普段の姿を見慣れているから、病院着とのギャップが大きすぎて、涙がにじみそうになる。

「たへさん、失礼します。センターの味方です。」

「あれ、あさちゃん、来てくれたの。」

「もちろんです。たへさん、具合はどうですか。わたし、昨日連絡を受けたときにびっくりして飛び上がっちゃいました。」

つとめて明るい声を出す。

「それがねえ、昨日いきなりおなかが痛くなっちゃって。痛み止めを飲んだけどどうにもならなくて、救急車を呼んじやった。」

「いまは、もう痛くないんですか。」

「いまはもう痛くない。打ってもらった点滴が効いたのかねえ。」

「いまも点滴がぶら下がっているが、これは痛み止めではなく脱水を予防するためのものらしい。」

「たへさん。入院はどれくらいになりそうなんですか。長引くようなら、私、鍵をお預かりしてたへさんのご自宅に荷物をとってきます。」

「悪いねえ。」

あさは挙げられたものをメモに書き留めていった。

「・・・それと、仏壇の引き出しに手帳があるから、持ってきてくれる？」

「手帳ですね。分かりました。色や大きさを教えていただけますか。」

「お薬手帳と同じくらいの大きさの、茶色い手帳よ。中には写真が入ってるから。」

「わかりました。」

幸い、搬送されるときに救急隊がカギやお財布の入ったバッグを一緒に持ってきてくれたらしく、最低限の貴重品はたへさんの枕元にある。鍵も施錠してあるとのことだ。いったんセンターに戻って他の仕事を終えてから夕方くらいにまた来ることを約束して、あさは病室から出た。

「タオルを2つ、あと肌着と・・・、そうだ、手帳手帳。」

夕方、たへさんから預かった鍵で家に入ったあさは、ボストンバッグに必要なものを詰めていた。仏間に行き、遺影に一礼してから引き出しに手をかけ

る。手帳はすぐに分かった。数珠や袱紗ふくさと一緒にしまつてある。薄いパスケースで、開くと両側に写真が入っていた。1枚は亡くなった旦那さんの写真だ。そしてもう1枚は、若かりし頃のたへさんの写真。旦那さんと息子さんと3人で一緒に撮つたものだ。

たへさんの息子さんから一時帰国する旨の連絡があつたよ、という笹川の言葉を思い出した。お互いの顔を見ればきつと安心するよね、帰国はいつになるんだろう。早くたへさんにも教えてあげたい・・・。

いろいろと考えを巡らせていたところにスーツのポケットの中で、携帯電話が振動した。センターからの連絡だ。

「はい、味方です。」

「味方さん、笹川です。・・・たへさんが、ついさきほど、お亡くなりになりました。」

あさの手が止まった。

ポーンと、家の居間にある時計が鳴った。

病院に着いて案内された部屋に、たへさんはいた。笹川も日馬もいる。

「味方さん・・・。」

2人は気づかわしげに自分を見ている。あさはまっすぐたへさんのもとに歩みよつた。

たへさんは・・・穏やかな顔をしているように見えた。なんならまだ眠っているような、そんな顔である。

笹川と日馬が教えてくれた。

あさが病室を出てから数時間後、ちようどたへさんの自宅にいるころ、急に腹痛を訴え、そのまま帰らぬ人となったこと。原因は不明だが、どうやら大腸が一部壊死えししており、それが死因となったのではないかと言われていること。息子さんはいもう帰国の途にっており、明日には日本に到着することのこと。

ひととおりの説明を聞き、改めてたへさんを見る。触れてもいいのだろうか。病院のスタッフに確認し、しわくちなな手をそつと握る。

「たへさん・・・・・・・・・・・・・・・・」

あさは知っていた。この手が、旦那さんを亡くし、ひとりで息子さんを育てたくましい手であること。冬の寒い日に、冷え性だというあさの手先をぎゅつと握って温めてくれた優しい手であること。

嗚咽おえつも慟哭なげも出ない代わりに、喉がぎゅうつと鳴った。

「たへさん、たへさん、たへさん、たへさん・・・・・・・・」

あさはたへさんの手を握ったまま、目を閉じて名前を呼び続けた。

帰国したたへさんの息子である信彦のぶひこさんは大変憔悴しているように見えた。

センターに来所した信彦さんに、このたびはご愁傷さまで、と笹川が言い、深く頭を下げた。日馬とあさも続けて頭を下げる。

「いや、本当にお世話になりました。母が電話で、みなさんの話をよくしてくれました。その様子が楽しそうで、僕も安心していたのです。」

そう言っつて、信彦さんがちらりとたへさんのほうを向く。

たへさんの枕元には最新の携帯電話があった。彼女のものだ。息子が買ってくれてねえ、とたへさんはいつも大切そうに持ち歩いていた。

「信彦さんがお孫さんの写真を送ってくれるのだと田村さんがお話されていました。」

そう話す日馬に信彦さんも頷く。

「ええ、母にわたしたちのドイツでの写真を見てもらいたくて携帯電話を買ったんです。もつとも、写真を見たり、電話をしたりする以外はまったく使い方がわからんと言っていました。」

皆が笑う。

「味方さん。」

信彦があさのほうを向いた。

「このたびは、母と仲良くしてくださいって、ありがとうございます。母は味方さんのことを、孫ができたみたいだ、なんて言っていました。味方さんにとっては世話のやけるおばあさんだったかもしれない。でも僕は、あなたが母と関わっていただけたことに、心から感謝しています。」

「いえ、私のほうこそ、たへさんにお世話になりました。たへさんは私が担当したのはじめての日常生活自立支援事業の利用者様でした。でも、それだけではありませんでした。」

引っ込んでいた涙が出そうになる。目の端に力を入れた。出るな、涙。私は後見センターの職員だ。泣くな。もう十分泣いた。いまは自分の思いをきちんと伝えるときだ。

「たへさんは・・・たへさんは、私がお宅にお邪魔するとき、いつも、玄関先で待っていてくれました。おいとまする際にも、姿が見えなくなるまで手を振ってくれました。こんなふうに一職員に接してくださったことが私には嬉しかったです。私は幸運だと思っています。たへさんみたいな素敵の方と、楽しい時を過ごさせてもらって。大変勉強にもなりました。こんな機会を与えていただき、ありがとうございます。」

一気にそう言って深く深く頭を下げた。

たへさんの葬儀は無事に執り行われたようだ。葬儀から数日後、信彦さんが挨拶に来た。来週にはいったんドイツに戻るのだという。

「みなさん、これを見てください。」

風がひとつ吹いた。

あさはジャケットを羽織り、市役所に背を向けて歩き出した。

背中には「新潟市社協」の文字が掲げられていた。

おわり